統一思想から見た性器官の存在目的を中心とする性倫理基準

ムン・サンヒ
鮮文大学校　純潔学科

目　　次

Ⅰ．序論
Ⅱ．性とは何か
　1．性概念
　2．性の構成要素
　3．理想的モデルなる性、絶対性
Ⅲ．性器官の存在目的
　1．子女の出産
　2．愛の完成
　3．血統の保存
　4．良心の作用

Ⅳ．性倫理基準
　1．従来の性倫理の特徴
　2．従来の性倫理の限界
　3．性器官の存在目的を中心とする性倫理基準
Ⅴ．結論

Ⅰ．序論

今日私たちの社会の性的に乱れた現象は社会全体を病気にする程の危険的水位に至っている。離婚率の増加、既成世代の性的逸脱、わいせつ物の流通、性の商品化による青少年らの売春、小中学生たちの集団暴行、未婚の母と堕胎の急増などの現象は、我々の社会の既存世代と子女の世代の性的逸脱の蔓延をそのまま物語っている。このような性の乱れに対する分析は見る視角に従って意見はまちまちの状態である。

伝統的性倫理の主張や急進的な性開放による無分別な性解放風潮の影響がその原因と見て性倫理を強化することを主張する。[1]これに反して、自由主義者らは自由な性の拡大現象の副作用程度に思い、むしろ性的享楽をより一層主張しながら、急進主義者などは道徳か

ら性の完全解放を叫んでいる。[2]

伝統的な性倫理の主張や、急進的な性解放論による性倫理廃止論では、性問題の対処に限界がある。伝統的な性倫理は性的自由を享受するために性倫理が性的抑圧を助長する足かせと思わせる者に性生活を指導する性の規範としての拘束力を喪失しつつある。一方、性を単純に私的な自由問題と見なして、性を倫理的治外法権で設定する性解放論は性の無秩序と放縦を助長する問題をかかえている。個人の性行為や性関係は私的な問題であるが、その結果は家庭と社会に多大な影響を及ぼしている倫理的意味を持っている。

性は「性とは何か、性の目的が何か、そしてその目的を果たすためにどのように行動しながら生きるべきか」という質問と直結している倫理的問題である。性は人格の表現であり、家庭と社会秩序と密接な関係がある。従って性の逸脱行為は家庭崩壊と社会無秩序の混乱を起こす。

性が私的な問題ゆえ倫理的規制が必要ないと主張して、性的な放縦につながるならば家庭崩壊と社会的混乱を正しにくいだろう。

私たちの社会の性倫理の危機を克服するために最も重要なのは、一人一人の正しい性意識と性行動を指導することができる性倫理の基準を確立することである。健康な家庭と社会秩序を成し遂げるために社会の大多数が普遍的に受容できる性倫理の基準をたてて、一人一人が健全な性意識と性態度で性の目的を成し遂げて生きていく倫理的人生に対する姿勢が必要だ。このために普遍的原理に立った統一思想的見解から性が何であり、男女の性を表象する人体機関の代表機関である性器官の存在目的が何かを省察する必要がある。これを土台に本論文では今までの性倫理に対する解釈の問題を分析して社会人誰彼問わず受容できる倫理的基準を設定し、性行為の許容可能な条件が何なのかを論じようと思う。

Ⅱ.性とは何か？

性倫理の基準を議論するに先立ち性の意味が何かその意味を明瞭にする必要がある。一般的に性の意味を三つに区分している。一つ目は男女の性別を区分する身体的、生理的作用の特徴により生物学的身体構造とその機能の側面を意味する自然的性、あるいは生物学的性(sex)という。二つ目に社会、文化的性(gender)として男性らしさと女性らしさの性役割と性差を現わす意味がある。三つ目は最も包括的な意味として生物学的性と社会文化的性を含む全人格的な性(sexuality)をいう。[3]しかしこの研究で議論しようと思う性概念は統一思想的視点で見る新しい創造論的性の意味についてである。

1. 性概念

従来の性概念は哲学的根元が人本主義哲学に立った性ならば統一思想による性は新しい

創造論の立場で相似の法則による原存在に似た性として理解する。[4]人間の性は原存在に似た父子関係として遺伝的な自然の法則により男女が生物学的特性に生まれて、社会、文化、教育的に学習された価値法則により人生を営む人格的な存在として理解することができる。[5]

新しい創造論の性概念が従来の性理解と違う点は人間の性は原存在に似て生まれた父子関係の子女というものだ。似たということは創造過程で適用される似る法則にともなう原存在の結果的、対象的位置にあるということである。従って、人間の性は原存在の拡張された自我という意味で、原存在と一つになった父子関係の血縁関係で、真の愛[6]の関係を意味するということである。

新しい創造論的性概念は従来の性の意味を持つ性倫理問題を解決するための限界性を克服することができる。性倫理問題の中心対象は生物学的、文化的性が含まれるが主に性欲望に関することである。性欲を表現して充足させる過程で発生する性行為や性関係が性倫理の中心対象になる。なぜならば性欲に対しどんな態度を持つのかは、その人の人格を代弁する倫理的意味を持つためだ。従来の性欲に対する理解は人間自身を中心とする性欲求の表出として自身の性欲望の枠の中で非倫理的性欲求を表出することができるが、新しい創造論的性欲の理解は原存在を失望させる非倫理的な性的欲望を表現できなくなる。人間は原存在に似た父子関係として原存在の拡大した自我であるので、真の愛と血縁で一つになって結ばれた関係だ。従ってお互いが共に喜び、共に苦痛を感じる関係である。真の愛の力は他人格と共に、一つになる経験を提供する。真の愛の力は人格完成に重要な役割をしながら、人間の性を倫理的性として作りあげる必要十分な条件である。[7]真の愛の意味の中に倫理的実践という内容を持ち合わせ、真の愛を中心とする人間の性は非人間化効果を持たない。従って新しい創造論による性欲求への理解は、性倫理から離れることはできず、性倫理の中で性行為や性関係が可能になる。

2. 性の構成要素

性の概念が従来のその意味と異なるので、それにより性の構成要素も既存の性教育者などが見る見解とは差がある。性教育者であるキム・サンウォン(1999)[8] ユン・カヒョン(2002)[9] イ・スンヨル(2000)[10]らは性の構成要素を「愛、生命、快楽」の3大要素で見ている。しかし新しい創造論的に見る人間の性は「心、体、関係[11]、法則[12]」の四つの要素などが集まってそれぞれ違った機能をしながら、有機的関係として離そうとしても離せない統合された要素として構成されている。このような四つの構成要素はそれぞれ固有の作用をすると同時に互いに作用して均衡を成し、調和と統合を成しながら「愛、生命、血統、良心」の作用で現れることになる。[13]言い換えれば一人一人の性は自分自身の中で「心、体、関係、法則」の構成要素によって「愛、生命、血統、良心」の作用が起こしている。一人一人は父母の真の愛の実として生まれた結果的、対象的子女として血統的、縦的に連結し

ている存在でありながら、独立した存在として横的で兄弟姉妹関係、そして結婚後には夫婦関係を形成することになる。このような関係は自然法則と価値法則に従って均衡、調和、統一を成す。すなわち人間の性は自分の父母の性が拡大して現れた性として「心、体、関係、法則」の構成要素がそれぞれ自然法則と価値法則により作用することによって、「愛、生命、血統、良心」の作用が均衡と調和を作り出して、自分の性の中で統合をなす。

このような議論の根拠は統一思想の原相論と存在論の中に見られる。原存在は性状形状の中和的統一体と同時に陽性陰性の調和体として存在する[14]という根拠で導き出されて、原存在に似た人間の性はその構成要素の「心」と「体」、そして男性と女性関係で存在する。また人間は相似の法則によって、個性真理体でありながら延滞として存在し、体は自然法則に従い、心は価値法則に従って存在する。[15]という説明から人間の性の構成要素である「関係」と「法則」を見つけられる。

構成要素の中で「心」には、知、情、意、愛の多様な作用があるが、代表的作用は「愛」であり、「体」の代表的作用は生理、生殖作用を代表する「生命」である。「関係」としての作用というのは男女が夫婦の縁を結ぶことになれば、生殖作用を通じて子孫が誕生して「血統」を存続し、種族保存が可能になる。「法則」の作用は心の羅針盤としての「良心」が理性によって、法則に従うように案内して刺激する。[16]　汽車が線路に沿って運行するように、良心は理性によって、法則に従って作用することになる。従って性の4大構成要素である「心、体、関係、法則」が、それぞれ同時に作用することによってそれぞれ「愛、生命、血統、良心」の作用の有機的関係として均衡、調和、統一を成し遂げることができるようになる。

新しい創造論的性の4大構成要素である「心、体、関係、法則」に対する説明は従来の性の3大構成要素の「愛、生命、快楽」に対する議論の限界点を克服することができる。
従来の性の構成要素でいう「愛と生命」は性の構成要素でなく心と体の作用で説明されるべきだと見る。上述したところによれば愛は心の代表的作用で、生命は体の代表的作用として理解することができる。快楽は性行為や性関係を通じて、結果的に感じる情緒的楽しみや喜びの表現として性の構成要素や性的作用に属することでないと見ることができる。
快楽を性の構成要素で理解することになれば快楽に耽溺する憂慮をもたらすことになる。
性行為や性関係は快楽を伴う典型的な経験だ。しかし性的快楽は一時的喜びの性格を持っていて、より一層強烈な快感を追求することになり性行為の目的が性的快楽で限定される可能性が大きい。性的快楽は節制しなければならない感性であって、性的に追求することを目的とすることではない。アリストテレスも感覚的快楽に対して正しく感じて行動して、節制ある生活を送らなければならないと強調した。[17]

従来の性教育者などは性の構成要素で良心の作用が従わなければならない価値法則を省略している。統一思想は人間として「当然すべきこと」と「当然してはならないこと」の規範を強調する。[18]この規範は価値法則として文化、時代、思想を超越して、人間ならば普遍的に誰でも適用される法則を意味する。特に性倫理で扱うべき最も重要な部分が性規範

だから価値法則をのがしてはならない。新しい創造論的性の構成要素は性倫理の核心要素の価値法則を強調することによって従来の性倫理問題解決の限界を補完することができる。

3. 理想的モデルなる性、絶対性

一般的に性に対する倫理的論理を大きく二つに分けられる。一つはアリストテレスの徳倫理として「私は道徳的にどんな人間になるべきか？」という質問に対する答を追求して、人間を善良にさせる特徴や性分、または徳で対して研究する。またもう一方は、カント倫理学と同じ義務論と功利主義のような結果主義または目的論の義務倫理として「私は道徳的に何をするべきか？」といった道徳的に当然の行為に対する質問をして答を追求する。[19]前者は人間の性的活動を性と徳の観点で論じる「理想的性」に関する論理と呼び、後者は道徳的観点で論ずる「道徳的性」と呼ぶ。倫理学者、ペルリオティは「理想的な性」が道徳的性の義務の要請をはるかに越える特別な善を提供するならば「道徳的な性」は性的活動が道徳的に許される最小限の条件を提示するという。[20]哲学者ヘアーは「理想的な性」を性と完成に関するより良い性とする一方で、義務と責務と関連して、必ずするべきことに強調を置く「道徳的性」で区分している。[21]リュウジハンは「理想的性」の中で完全主義を指向する価値観を持った人は愛、生命、快楽の3代構成要素を総合的に全て実現して、愛、出産、快楽の価値を最上の形態で具現する性だと説明する。一方、「道徳的な性」は道徳的に許されるために必要な条件だけを問題にするため「理想的性」に比べて、客観性と普遍性を確保しやすく、今日の多元化傾向の性倫理は道徳的な性を中心としていかざるを得ない。[22]と述べる。

上述の性倫理の論理が「理想的性」と「道徳的性」で区分して説明したのは、性概念と性の構成要素に対する理解の差から来る限界性を持つためである。

新しい創造論的性概念で論じたところによれば人間の性は原存在の拡張された存在としての性である。従って原存在は真の愛の根源者として理想的性の源泉であり、道徳的性の根源であるから原存在の中で理想的性と道徳的性が一に統合されているように、人間の性もやはり「最も理想的モデルなる性」一つに統合されなければならない。従って理想的性と道徳的性を分離しては理解できない。理想的な性になるためには道徳的、倫理的性が必要条件であるためだ。

また新しい創造論的性の構成要素で論述した通り、理想的モデル的な性、完全な性は性の4大構成要素が同時にそれぞれ作用することによって「愛、生命、血統、良心」が作用し、夫婦は互いに夫婦間の愛を具現しながら、子女を出産して、父母になって、性倫理的原則に従って血統的に父母、子女、兄弟姉妹関係を形成し、家族構成員を具現することになる。すなわち性の４大構成要素が四つの作用を通じて、球形運動を成し、実体的な３大権と４大心情権[23]を成し遂げて、家族構成員が具現されるのを理想的モデルなる性だというのである。

人間の理想的モデルなる性は絶対性を成し遂げる時、可能になる。絶対性というのは人間の性の絶対性質を意味する。

人間の性は原存在の拡大した性であるので、原存在が絶対、唯一、不変、永遠の属性を持っているので原存在に似た人間の性もやはり絶対、唯一、不変、永遠の性質を持っている。従って人間の性は絶対性、唯一性、不変性、永遠性だといえる。絶対性質は唯一、不変、永遠の性質が含まれるので属性などの中で代表的性質として絶対性だと称する。原存在が唯一無二の存在のように人間は唯一無二の存在として顔の形、趣味、性格、創造能力などが同じ人は一人としていない。配偶者もやはり唯一無二の存在なので最も尊く神聖な価値を持った存在である。[24]絶対性を成そうとするなら必ず純潔の徳を遵守しなければならない条件がある。絶対性具現の究極的目的が真の愛の完成であるから真の愛の基礎であり、出発点であり、土台は「配偶者のための純潔さ」である純潔の徳性を具現することによって待つことへの精誠と信頼感を積んだ上で真の愛が可能になる。

人間の理想的モデルとしての性、絶対性は純潔の徳から出発して、性の4代構成要素の作用の「愛、生命、血統、良心」の作用が球形運動を通じて、人間の性の実体を具現して、家庭の3大権と4大心情権が実現されるのである。理想的モデルなる性は人類全てが果たすべき究極的存在目的であり、必ず成し遂げなければならない方向である。

Ⅲ．性器官の存在目的

人間の性を代表する身体機関の代表的機関は生殖器である。全ての存在はその存在目的を持っている。存在世界全ての存在する存在目的はその存在の構造と作用を見れば目的が分かる。例えば人体の目の構造と機能を見れば目の目的は「あらゆる事物を見るもの」ということが分かるように生殖器の構造と作用を分かれば生殖器の目的が分かる。[25]生殖器の用語を解いてみると「生命を入れる器」という意味になる。これは生殖器が生物学的に単純に男女を決定する所というものの他に生命と血統に直結されるという意味がある。

生殖器は体の中央部の上に位置して、男女の愛の掛け橋としての役割を遂行するようにした生命を誕生させる所であるから性欲求に対する性行為や性関係について倫理的問題が伴う貴重で神聖な機関である。生殖器の構造を見れば男性と女性の相補性を正確に知ることが出来る。

1. 子女出産

男女の生殖器は子女の出産のために必要な機関になっている。生殖器の陰茎は性的刺激を受けると血液が入って大きく丈夫になる。これを勃起という。陰茎が勃起する理由は、勃起することで女性の膣の中に挿入しやすいためであり、陰茎が外に出ている理由は男が射精を通して、精子を女性の生殖器内に深く投与することができるようにするためだ。ま

た精子は低い温度が適しているので、体温より低くするために精子を保管する陰嚢が外に出ている。男性とは違い女性の生殖器官が内部にある理由は、女性が妊娠するために精子を受け入れやすいようにするためであり、精子と卵子が子宮で受精して着床しやすいようにするためである。また卵子と子宮は暖い所が適しているので内部にある。

生殖器の生殖作用と生理作用で第一次性徴はたった今生まれた子女の性器官を通じて、性を区分できる性徴である。成長して、思春期になる時、第二次性徴が現れる。このような生理的変化が現れるようにする性ホルモン分泌の機能が生殖器に現れる。第二次性徴を通じて、男と女の生理現象と生殖現象に大きな違いが現れる。男性は男らしい身体的姿に変わり、女性は女らしい身体的姿に成長することになる。第二次性徴が現れた以後からは大人に成っていっているという兆候で、生殖作用と生理作用の成熟によって、子女の妊娠が可能になる。このような生殖器官の構造と作用を見ると、生殖器の最初の存在目的は子女を出産する目的があることが分かる。

子女の出産は性倫理と直結する。子女出産というのは、父母自身の拡張であり、第二の自我が誕生するのだ。子女の誕生というのは、夫婦の愛の実で、倫理的性行為と性関係の結果だ。夫婦の愛と倫理的性行為の結果は妊娠・出産・養育につながり、夫婦は「子女の父母」というタイトルが与えられる。従って夫婦の性行為と性関係というのは、父母になる可能性への準備と養育の条件をそろえなければならない責任がある。

性器官の存在目的は子女出産のための父母の役割と責任、すなわち養育の責任を全うする時、その目的が実現される。万一、性行為の結果妊娠しても、出産に対して責任を負おうと思う姿勢と父母としての役割と責任を果たす準備がないならば、妊娠は出産につながらず、堕胎で片付けられる可能性が大きい。あるいは出産につながるにしても養育の条件が不備で、正常な父母としての養育が不可能ならば、その子女の生存が危険であったり子女の未来が不透明で暗い一生を生きていくという不幸を生み出すことになる。従って多様な性行為や性関係は出産に対する倫理的責任が伴う行為なので性的活動に対する規範で規制できて普遍的に受容できる性倫理の基準が提示されなければならない。無責任な堕胎を予防するためにだけでなく、意図的な無子女家族を防止するためにも性器官の存在目的の中で出産の当為的義務に対する性倫理の基準が定立されなければならない課題が与えられる。

2. 愛の完成

男女の生殖器を共に見る時、その存在の必要性と目的が愛を育てるために存在するということを簡単に知ることが出来る。男性の生殖器は男性自身のためのものでなく、女性と共に性行為や性関係を通じて愛を成熟させるためにあり、女性の生殖器もまた男性の生殖器と調和を作り出して一つになるための凹凸の形状を持つ。すなわち男女の生殖器が違う形の構造を持っている目的はお互いを差別して、攻撃したり戦うためにあるのでなく、互

いに協調的で相互依存的な調和がとれて統一された愛の相互作用を成すためである。男女の性行為は夫婦性関係の快楽を楽しむように創造主が特別な贈り物として人間にくれたものである。[26]動物は発情期の時だけ交尾ができて、自動的に性欲求を調節することになるが人間はいつでも夫婦間に愛と性を楽しむように作られている。しかし万一、人間が性的快楽だけを積極的に追求するならば、追求すればするほど快楽的な満足だけに遠ざかる逆説的性格を持っている。快楽のこのような現象を快楽主義の力説(paradox of hedonism)という。性的な快楽に耽溺すればするほど、より一層強烈な快感を望むことになり、望む分だけ満足から遠ざかることになる。快楽的感性は瞬間的であるために性行為を快楽に限定させればさせるほどより大きい空虚感と不快感に変わる可能性が大きい。それで人間はより大きくて風変わりな快感を探すために他の異性に関心を向けることができるようになる。快楽を追求する人生は自分の快楽に焦点を合わせて、相手を自分自身に快感を与える性的道具にしてしまう可能性が大きいから婚前の純潔や結婚後の貞節の徳性を具現するのが容易でない。快楽追求の性行為や性関係は瞬間の快感のために永遠の愛を逃す可能性が大きいためである。

従って夫婦間の性行為や性関係を通した性欲求の充足は性的快楽を追求することにその目的を置くことより夫婦間の信頼感を土台にして、親しみを篤実にして愛を育てていく促進剤の役割として期待できるのである。愛を育てていく性は原存在に似た人間らしい性であり、性の人格を具現できることになる。一人一人は個性真理体としてそれぞれ最も大切な価値を持っているので、愛というのは、他人格の価値を尊重して認めるところから出発して、相手のための献身と犠牲が必要である。このような犠牲の最初の条件は純潔を守ることである。婚前の純潔を守るということは未来の配偶者のためにいかなる快楽的誘惑にも惑わされず忍耐しながら、自身の性欲求を克服することで、相手に対する信頼感を与えることになる。婚前純潔を基盤に結婚後の夫婦関係は互いに厚い信頼感で貞節を守って行くことになる。

夫婦性関係で相手を愛するための倫理的条件は相手方を自分自身と同じ人格を持つ者として尊重して貞節を守ることである。相手も私と同じ個性真理体として原存在が拡大した神聖な人格体であることを認めて、絶対、唯一、不変、永遠の配偶者として貞節の土台の上で愛が始まるのである。従って相手の考え、意志、欲求、感情を無視して浮気をしながら、相手を愛するということはできない。文先生の教えの中で「性器官の主人は配偶者」[27]という強調は、婚前の純潔と結婚後の貞節を強調する意味で、夫婦性関係で配偶者を私の性欲求を解消するための手段的対象でなく、原存在の拡大した私自身と同じ人格体として完成に向かっている目的対象に尊重しなければならない。一歩、進んで原存在に似た原存在の目的対象として神聖な価値を持った存在として認めなければならない。

従って真の愛は人格尊重を越えた献身と犠牲を要求する。自分の献身と犠牲が伴わない限り互いに人格を尊重する性関係といってもそれは相互尊重の性的取り引きや契約的性行為に留まる。愛ある性は相互尊重の義務を基礎にしたお互いの献身と犠牲によって、一体

感を感じながら、愛が完成される。

3. 血統の保存

性器官のまた他の目的は性器官の四つの作用の中で生命の作用と直接的に連結している。生命の作用が身体的成長変化と妊娠・出産・養育に焦点を合わせるならば、血統の作用は出産後の養育と広く拡大した縦的、横的な人間関係に焦点が与えられることになる。性器官の構造と機能は出産を通じて、父母、子女、兄弟姉妹の家族を形成しつつ一歩進んで、親族と国が形成されながら、世界へ拡張されて、世代が保存され、合わせて歴史が存続する血縁関係を結束させる作用がある。核家族時代においては、一般的に私たちは血統的縁に対する時、父母、兄弟、姉妹関係という限定された中で直接的な養育に責任を負うことになる。しかし血統的作用に対する説明は、血統で結ばれた直接的な家族関係だけでなく親族、種族、国家、世界、天宙まで拡大して、一つの血縁関係で理解することになる。従って血統保存作用への理解は性器官の存在目的が近い親族と種族保存だけでなく人類全体の歴史を存続させることにあることが分かる。

万一、女性か男性、一つの性だけしかなければ血統が続かないので一世代で終わり、変化発展もなく、人類歴史の存続は期待できないだろう。すなわち生殖器の構造が二種類の性で、おうとつの構造で構成されているのは互いに違う人間の性が調和を作り出して、協力して全体が共存共生するためだ。生殖器が二性でそれぞれ違った構造で存在するということは原存在に似て陰陽の関係で構成しているのだ。[28]

夫婦間の性結合は陽性間の遺伝子結合を通じて、遺伝的で多様な個性を創造することによって変化発展する多様な環境遺伝子の適合性を増大させて子孫の生存の可能性を高める機能である。[29]とウィルソンが述べた通り、生殖器の作用は性関係を通じて遺伝的な多様性を創造することによって、家族の特性と違った種族を保存して人類の存続を可能にする。

性器官の作用は性行為の過程を経て、新しい生命が誕生するという結果を産む。人為的な統制なしで一定の条件が合うならば性行為の過程は新しい生命の誕生により結果が現れる。従って全ての性行為は必然的な結果として新しい生命を誕生させることができる潜在的可能性を持っている。

生殖器の新しい生命誕生を目的とする構造と作用は原存在が原存在の創造性を人間に相続した偉大な創造的価値を人間が実現するという意味だ。

原存在が人間を彼の子女として創造して、原存在自身を人間として拡張させ、人間自身の子女を誕生させることによって、人間自身が子女を通じて拡張されただけでなく原存在を拡張させた結果を産むことになるのだ。そのような意味から来た人類は一つの原存在の基に一つの兄弟姉妹であり、家族であり、一つの血筋という結論に至ることになる。文鮮明先生の教えの中で人類は「神の基の人類大家族」[30]という命題はこのような理由で妥当性がある。

このような意味から生殖器の価値がどれくらい神聖で高貴なことかを知ることができる。そういう価値があるにもかかわらず、人間が性欲求の快楽を楽しむための性的放縦を行う道徳的危機を克服するために一人一人が性器官の価値と存在目的を悟るようにする性倫理の基準を設定しなければならない課題がある。

4. 良心の作用

存在世界の全ての存在はその構造が存在の目的に合う構造で構成されているだけでなく、その存在目的を実現する固有の存在方式を持っている。同じように生殖器の構造と作用はその生殖器の存在目的を果たすための存在方式がある。例えば、マイクの構造や作用は音声を大きく拡大して、大声を作り大衆が聞けるようにする目的がある。マイクはその目的を果たすための決まった使用方式がある。マイクは人が話す時や歌を歌う時に使うべきで、他の道具として使えば故障が起きることになる。同じように生殖器の構造や作用はこれまで述べてきた通り子女を出産したり、夫婦の愛を育てていく目的を持ち、性的快楽は瞬間的快感として夫婦の愛を促進させる促進剤の役割をすることになる。また性器官の作用は家族と種族、そして人類を存続させる血統保存の目的を持つ。生殖器の使用は目的のために使用しなければならない適合した方式がある。適合した生殖器の使用方式というのは婚前の純潔を守って、結婚後に、ただ配偶者と性行為や性関係を成し、夫婦間の厚い信頼感を積み上げながら、愛を成熟させていく。愛というのは、自分自身が他者に拡大されて、彼の喜びが私の喜びになって彼の苦痛と悲しみが私の苦痛と悲しみとして感じることをいう。このような夫婦関係は価値法則を越えた献身と犠牲の関係として、離そうとしても離せない親密な夫婦一体の統合した関係を作ることになる。従って夫婦が結婚後の貞節を守るということは当然のこととして受け入れられる。このように和合と統一を成し遂げた夫婦は性行為と性関係を通じて、子女を出産することになり、そういった環境で養育される子女は安全に保護された中で愛を受けながら、成長して、前向きな未来を期待できるのである。生殖器官の正しい使用は言及した通り、夫婦関係で性行為と性関係を成してこそ健康な性、安全な性を成し遂げられ、その目的を実現することになる。

統一思想では全ての存在の存在方式は、自然法則と価値法則から離れた存在、作用、繁殖、発展する存在はないと述べる。万一、このような自然法則から離れるならば、存在は消滅したり自ら破滅してしまう。特に、人間の性は性の価値法則により性行為、性関係が成り立たなければならない。人間が価値法則から離れた性行為や性関係を成せば一番最初に良心が誤った性行為であることを知って人間自ら苦痛と葛藤、そして痛みを体験することになる。人間の性が価値法則に従って生きるように作用するのは私たちの良心が作用するためだ。[31]例えば、一般的に結婚した夫婦が浮気をすることになれば自分自身の配偶者に隠そうとする。それを配偶者に誇ることができないのは自ら良心作用によって、自分自身の浮気が性の規範から逸脱していることが分かるためだ。統計によれば、婚前に同棲す

る人々の中の大部分の90%以上の人々が自分自身の同居を他人が知ることを願わず、同居の人生を隠そうとしている。また、未来の配偶者が過去に同居したという事実を知ることになれば結婚しないという応答が70%以上占めた。[32]このような統計を見れば結婚した配偶者以外の性行為や性関係は良心が喜ぶ行為ではないとの事実を語ってくれているのである。

前述した通り性器官の存在構造と作用は四つの明らかな存在目的を語ってくれ、それに沿って存在する存在方式、価値法則があるという事実は、誰もが受容可能な普遍妥当な倫理的根拠と提示できる。

Ⅳ．性倫理基準

新しい創造論の倫理基準を述べる前に、まず従来の多様な性倫理の解釈の立場を検討し、それぞれの特徴と限界を調べた後、これらの立場を総合的に判断して、普遍的に受容可能な性倫理基準の代案を模索してみようと思う。

1．従来の性倫理の特徴

上述の理想的モデルなる性で言及した通り、一般的性倫理の論理は大きく分けて、理想的性倫理と道徳的性倫理の二種類の観点から見ることができる。理想的性倫理はアリストテレスが代表的に主張した性的活動の善と徳の観点から見て、道徳的性倫理はカント哲学の道徳的義務の観点で議論する性倫理がある。ペリオティによれば理想的な性倫理は最大の道徳に近い性的活動で称賛と推奨の基準を持っている。[33]と見ながら、道徳的性倫理は性的活動が道徳的に許されることができる最小限の条件や基準を提示するという。従って、道徳的な性は許容と禁止の基準だということができる。

もう少し具体的に理想的性倫理と道徳的性倫理という二つの観点の特徴を調べてみることにする。理想的性倫理は性の価値をどこに置くかにより見解が対立する。性的活動の価値を生殖価値(子女出産)、快楽価値、人格価値などの関係の序列に従ってある価値に排他的優先性を付与したり、あるいは性の価値などを序列を定めて考慮したり、二つを総合的に考慮する方式で性論理を展開する。

すなわち性の本質的価値を快楽に置く価値観で見る視角からは、最高の快楽を持つ性が理想的な性だと快楽に焦点を合わせる。これに比べ愛が性の本質という価値観から見る見解は、愛がある性は理想的で、愛がない性は悪い性だという。この立場は愛の価値実現のために人格尊重の義務と献身と犠牲を強調して性関係による人格の統合性を強調する。[34]一方、生殖価値を中心に価値序列を定める価値観からの見解は、生殖のための性と養育のための性は理想的な性で、生殖と関係がない性は悪い性とする。また完全主義を指向する価値観は出産、快楽、愛の価値を総合的に全て実現するのを理想的性だという。

これと共に理想的な性は価値観によって、理想的な人生の形式が何かによって多様だが

代表的な理想的性倫理の基準は愛と人格的徳性を基準とするため理想的性に対する普遍的合意はほとんど不可能だという。従って現代社会の多元主義的特徴が普遍的に受け入れ可能な理想的性倫理を確立することは難しくて望ましくないと見ている。[35]一歩進んで、現代性倫理学者らの見解が理想的中心の性倫理は性的活動の模範を定立して、それに従うことを要求するため普通の人が遵守するには無理があり、聖人君主であるなら可能だと見ており、理想的性倫理は適切に使えないと見る見解が圧倒的だ。

道徳的性倫理の既存の理論等も概して結婚と出産中心の性倫理、快楽と契約中心の性倫理、愛中心の性倫理などの三つの立場に要約することができる。

最初に、結婚と出産中心の性倫理は性の自然的目的を出産だと見て出産に寄与することが価値ある性行為と見る。合わせて性行為に対する責任を強調する。そして性の安全性を重視して、結婚による性を強調する。トーマスアクィナスが性の自然的目的を出産に置いた代表的学者だ。[36]出産中心の道徳的性は性行為や性関係が妊娠・出産・養育につながることが自然な性の結果として全て責任を負うことができる最善の方法は結婚という枠組みに制限させることだという。安定した子女養育の条件は結婚した家庭内だけで全て整えられると主張する。

これに異見を提示する学者はウィルソンで、性的活動は二次的に結合装置と見なさなければならず、単に付随的な生殖手段と思うべきだと主張する。[37]多様な性的異常らが互いに葛藤している現代社会の多元主義と調和を作り出すのは難しいという。

二つ目に快楽と契約中心の性倫理は性の中心価値を快楽に見る。快楽それ自体として価値があるので性的快楽の追求が目的になる。この立場は自由主義性倫理だ。これらの主張は性はスポーツと同じように楽しみを追求する一つの活動で正当な道徳規則や原理を違反しない限りいかなる性的活動も道徳的に受け入れ可能になると見る。ミールは彼の＜自由論＞で「他人に害悪を与えない範囲内での最大限の性的自由」を主張する。[38]これらの原理は「害悪禁止の原理」と「自律性尊重の原理」が結びついている。

三つ目に愛中心の性倫理は愛を性の基準として提示する。愛ある性は道徳的に正しくて愛のない性は道徳的に正しくない。それらは愛だけが人間の性の固有な価値で人間の尊厳性を作ると強調する。ジョン ハンターとロージャス クルートンは愛のある性は他の人格と共に一つになる経験を提供することによって、私たちの自我実現と人格の完成に重要な役割をするが、愛のない性は人間を獣またはそれ以下の存在に転落させて、人格の破片化を招くと主張し、愛中心の性倫理は性的自由と性の責任を愛で折衝するという点で中道主義性倫理という。[39]

四つ目は、他の道徳的性倫理の見解は多様な道徳的性倫理の立場に対して限界を指摘しながら、人間の性的活動は行為と関係の二つの側面から見ることができ、性行為に対しては「責任の性倫理」としてその結果に対する責任を要求することを強調し、性関係に対しては「尊重の性倫理」基準を提示して尊重することを提案している。理想的性倫理では「愛」と「人格の徳」を性倫理基準で提示するため、過度な要求なので愛の前提条件の尊

重を道徳的性の基準として要求することを提案している。[40]それは責任に対する三つの義務事項を要求する。
最初に、性行為を通じて、性行為当事者は第三者や社会に害悪を及ぼしてはいけない。
二つ目に、性行為によって悪い付随的な結果を産まないように予防措置を力を傾けなければならない。三つ目に、性行為の結果が可能な限り良い結果になるように努力しなければならない責務を持っていると主張する。それは「事前行為責任中心の性倫理」を主張する。
性関係で尊重すべきことは性関係対象を手段的存在で見ず、目的存在で対さなければならないという要求だ。すなわち性関係で人格を尊重するということは、人格を対象化しない強制、欺瞞、搾取のない状態で相互自発的な同意の下に性的欲望を互恵的に充足することというものだ。
このような主張の根拠は、カントが単純に手段で対さずに目的を尊重する公的義務で区分する主張で性倫理を適用したのだ。

2. 従来の性倫理の限界

従来の多様な性倫理は大きく二つに分類されて、理想的な性倫理と道徳的な性倫理として性論理を語っている。

最初に、従来の性倫理の限界点は上述のモデルなる性、絶対性で言及した通り性論理を理想的な性倫理と道徳的な性倫理とに分離して、人類の普遍的な性倫理基準を提示しようと試みた点だ。
人間の性は原存在の拡大した性であるから性の倫理的基準を原存在で探すことができる。原存在の性は最も理想的であり、根源的なモデル的性だ。原存在の中に愛と徳性の基準があって、道徳の基準が統合されて存在するから人間の性もやはり「理想的な性」と「道徳的な性」とに分離して、その基準を設定できないのだ。このような限界点は性概念を新しく理解することになる時、その解決が可能だろう。

二つ目に、人間の理想的で完全な性の価値を「出産、快楽、愛」の三種類の価値に限定させたことは人間の性価値を縮小させたという点において限界がある倫理である。これは性倫理から抜くことのできない核心的な作用として良心作用の価値を見過ごした。人間の性は原存在のロゴス的属性に似たので規範的な存在として自分自ら善意と正当性を確認しながら生きている。一人一人は自分自身どんな考えを持ち、行為があるいは関係が正しいことか、悪いことか、偽りか、真実か、自ら判断する判事を自分自身の中において見守り生きている。自分の中の判事が良心作用として人生の羅針盤になるのだ。自分が過ちを犯して自分自身をいくら正当化、合理化しようと努力しても良心は自分自身の行為が正しいのか、その反対なのかを知っている。

文先生の教えの中で「良心は神様に優り、師匠より優り、両親より優っている」と強調される。[41]

三つ目に、従来の理想的な性倫理で出産、快楽、愛の三つの性価値の中で、ある特定の価値を性の本質的価値と考え、性の価値を偏向的に焦点を合わせて、理想的な性倫理の性格を歪曲させている。理想的性価値がどちらか一つの価値だけを強調するならば偏重された見解の性倫理自体は理想的性倫理になれないだけでなく、どちらか一つの価値、すなわち出産でも、快楽や愛の価値だけを中心に性活動を展開するならば人格の均衡と調和、そして統合された性行為や性関係を難しくさせるという制限がある。

四つ目に、従来の性倫理学者らは多元主義的社会で理想的な性倫理の基準は、模範的に性の倫理基準を確立しており、普通の人はその基準に従いにくいため妥協点を作って、普遍的に適用可能な道徳的な性倫理を一般化させることを主張している。このような見解は「普遍性」という意味を明確に解釈できないと見られる。一般大衆の大多数の人々が受け入れるならば、それが普遍的基準とされるのか？少数の人々がどんな基準かによってはそれは普遍的原理になれないということなのか？普遍性というのは受容する一般大衆の数に従って決定されるものではない。文化、思想、時代、地域、人種を超越して、どこの誰にでも適用可能な原理が「普遍性」の意味だ。普遍的な性倫理基準に及ばない人々がいくら多かったとしても、性倫理の理想と原則は変わらないのであり、時間をかけた教育を通じて、原則の基準に到達するように啓蒙しなければならないだろう。言い換えれば、理想的な性倫理の基準を普通の人に合わせて、妥協することが正しいことでなく、普遍的基準に人間の性意識と性活動が到達できるように持続的な教育が進行されなければならないだろう。

五つ目に、道徳的な性倫理は責任と尊重の義務を性の基準として提示している。
愛のない性、出産と関係のない性、結婚と関係のない性でも責任と尊重の義務を果たすひとつの道徳的に許容可能な性と見ながらも、反対に愛があって、出産と結婚の枠組み中にあって、同意による性であっても無責任な性と相手の人格を尊重しない性は道徳的に許されないと見る。
この観点で見れば生殖が不可能な同性間の性的活動でも同性愛者などが相互に尊重して自分たちの性に対して責任ある行動をするならば同性愛を禁止する道徳的名分がないことになる。道徳的観点では、他人に直接的害悪を与えず、また社会的害悪を持たない限り同性愛は禁止されてはいけないと主張する。これらの見解は道徳的に重要なのは愛の対象が同性なのか、異性かでなく相手に対する責任と尊重の態度と見ている。従って婚前の性関係も責任と尊重する態度だけあれば道徳的に許されると見る見解だ。[42]しかし彼らは未成年者の性関係は青少年ら自身に害悪が行き、未婚の母や堕胎の増加で社会全体に害悪を与えるため道徳的性として支持されにくいという。[43]

道徳的な性倫理で提案する性倫理の基準が「責任と尊重」を主張するのに「責任と尊重」の基準や限界が何か明確にできないでいる。道徳的な性倫理基準は、自分たちや社会に害悪を与えず互いに性の主体者として自律的な同意による責任と尊重で同性愛が可能だというが、同性愛は直・間接的に個人や社会に大きい害悪を与えているという事実を見過

ごしている。原存在の拡張が人間の性であるから原存在が陽性陰性の調和がとれた統一体を成し遂げる根源的存在なので、彼の拡大した人間は男女、異性で互いに調和を作り出して統合される性関係が性倫理の基準で許容可能になる。同性愛者などは当代で終わってしまう性関係なので性器官の存在目的中心の性倫理基準からかけ離れている。道徳的な性倫理で主張している「責任と尊重」中心の倫理的基準は、同性愛者は種族保存の機能を無視する性行為や性関係によって人類の存続と歴史の発展を阻害する最も大きい害悪を犯しているという事実を見過ごしている。 婚前性関係も責任と尊重があれば許される性関係と主張するが、性器官の存在目的を中心に見る時、愛する相手のために本当に責任をとり尊重する態度とは結婚の時まで保護して守るということだ。
愛の属性と性の属性が絶対、唯一、不変、永遠なことだから公式に許諾を受ける婚姻の時まで待ってくれることが相手に対する真の尊重で、責任を負う姿勢だ。
　また愛のない性、出産と関係のない性、そして結婚と関係のない性でも「責任と尊重」という性ならば道徳的な性だと主張するのは、性の概念と構成要素をよく理解できないでおり、性器官の存在目的が分からない状態から起因した誤った主張だ。
愛のない性は単に自分自身の性的快楽を楽しむための性であるから、相手に対する真の尊重だと見ることができず、相手に精神的な害悪を与えることになる。従って相手が自分の快楽のための手段としての対象でなく、目的としての対象に感じなければならないという「道徳的性」が主張している自分自身の中の矛盾に陥る主張になる。出産や結婚と関係のない性は婚前、婚後の性行為や性関係の許容としてfree sexを助長する性になるだけでなく、出産を避けるため避妊する性関係が完璧な「責任と尊重」の性関係とは言えない。避妊が願わない妊娠を予防するのに100%の可能性を大言壮語できないならば、万一、妊娠したら、その子供は堕胎の犠牲者になったり、出産しても養育の準備ができていなかった父母から生まれることによって子供の養育に対する期待が不透明になる。従って堕胎という害悪行為が可能で、養育できる保証がないならばそれは子供に加える損害に間違いない。
結婚と関係ない性は結婚という公認された性関係の許された関係を無視する非道徳的性になる。結婚の意味は夫婦関係で公認する性関係を意味しながら、子女を出産すれば摘出児として認める意味を持つ。また結婚を通じて親戚関係が公認された関係として始まるのだ。従って結婚と関係のない性はやはり社会で家族関係の無秩序を助長するという害悪となる。
真の「責任と尊重」がある性というのは、相手を原存在の拡張された存在として個性真理体の延滞として理解しながら、絶対、唯一、不変、永遠の目的存在として性器官の四つの存在目的に従って相手のために愛する性だ。

3. 性器官の存在目的中心の性倫理基準

　上述したところによれば人間の性は原存在に似た原存在の拡大した性で、性の構成要素にともなう性行為や性関係の作用は絶対、唯一、不変、永遠の属性に従って愛、生命、血

統、良心の作用をしていると論述した。従って人間の性器官の存在目的は愛完成、子女出産、血統保存、そして良心作用の球形運動によって、3大権と4大心情権を形成する家庭完成だ。従って人間の理想的な性は婚前の純潔と婚後の貞節を守って、絶対性を具現するのだ。

このような倫理的基準はどんな性倫理、または性行為、性関係にも妥協不可能な普遍的で、絶対的な性倫理基準になるのだ。多元化主義時代だから普通人間が従うことができて守ることができる性倫理基準と妥協が必要だと見るかも知れないが、人間の性が愛、生命、血統、良心の作用が成り立つように構成されており、作用するため、他の倫理的基準を選択する余地がないのだ。目が目の構造と作用に従う方式で事物を見て、目の管理をして、保護をして、守ってこそ明るい世の中、美しい世の中を見られるのと同じように、いくら性欲求を管理し調節するのが大変であっても、性器官の構造と作用に従って性器官を使ってこそ、究極的で安全で自由な性器官の作用が可能であるため、多様な性的誘惑から勝ち抜くことができる節制力が必要である。節制しにくいだけに待った後で配偶者とだけの性行為と性関係を持つ時、最も安全で、安らかで信頼感を持った美しい人格的性行為、性関係が可能になるこ。現代を生きていく私たちは多元化時代で生きているが、性器官の存在構造と作用の原則を無視する性倫理はあり得ないのだ。人類が普遍的に受容可能な性倫理基準は理想的モデルなる性、絶対性としての「愛の完成、子女出産、血統保存、良心作用」の四つの作用が一つに均衡、調和、統一を成し遂げる球形運動を展開するのである。万一、この四つの中にどれか一つの作用が不足しても完全な性だと見られないため、均衡を成す人間の性になるべく持続的に教育して努力しなければならない。

Ⅴ．結論

私たちの社会の性倫理の危機を克服するために一人一人の正しい性意識と性行動を指導することができる性倫理の基準を確立する必要があったので、従来の理想的な性倫理と道徳的な性倫理の特徴を知って、その限界点を検討し、性器官の存在目的を中心とする性倫理基準を提示しようと論じた。

この文の議論は普遍的原理に立った統一思想的見解で、性が何であり男女の性を表象する人体器官の代表器官である性器官の存在目的が何かを省察した。従来の性倫理が理想的性倫理か、あるいは道徳的性倫理かの焦点となるのが、「出産、快楽、愛」の三つの性的価値を打ち出して、普通の人が守って従うことができる「責任と尊重」ある性倫理基準を提示し、同性愛や婚前の性関係など「責任と尊重」がある性行為や性関係は道徳的に許容可能だという主張に対する限界点などを指摘した。

新しい創造論的人間の性は原存在の拡大した自我として、人間の性器官の構造とその作用で見た性器官の存在目的の「愛の完成、子女出産、血統保存、良心作用」の四つの普遍的価値の倫理的基準を導き出すことになった。一人一人が四つの「愛の完成、子女出産、

血統保存、良心作用」の性倫理基準を絶対、唯一、不変、永遠の愛の属性により絶対なる性、唯一なる性、不変なる性、永遠なる性を果たすための純潔と貞節に基づいて性行為や性関係を持つことによって、一人一人の人格の中で愛、生命、血統、良心作用が均衡、調和、統一を成す球形運動を作りあげることになる。このような球形運動を通じて、3大権と4大心情権の愛で理想家庭を完成しなければならないことを強調した。家庭でこのようなモデルなる性、絶対性を具現しようとするなら粘り強くて持続的な性倫理基準に対する教育が家庭、学校、社会全般で成り立たなければならない。

参考文献

キム・サンウォン、(1999)、性教育/性相談の理論と実際、ソウル：教育出版社

リュ・ジハン、(2002)、性倫理　P10　ソウル：ウルリョク

ムン・サンヒ、(2007)、父母-子女が共に果たす絶対性、鮮文大学

文鮮明、(2007)、宇宙の根本を探して、ソウル：成和社

文鮮明、(1996・9・8)、文鮮明先生み言葉選集、279巻、P222

文鮮明、(2007)、平和メッセージXV、摂理的観点から見た3大主体思想」、平和訓経、ソウル：成和社

パク・チャング、(1997)、性的自由はどこまで許容されるべきか？　ソウル：タムロン社

アリストテレス、チェ・ミョングァン訳(1988)、ニコマス倫理学、ソウル：ソグァン社

牙山社会福祉事業財団、(1997)、現代社会と性倫理：第8回社会倫理シンポジウム
牙山社会福祉事業財団出版

エドワード・ウィルソン、リ・ハヌム訳、(2000)、人間本性に対し、ソウル：サイエンスブックス

ユン・カヒョン、(1998)、性文化と心理、ハクチ社

ユン・カヒョン、(1990)、性心理学、ソウル：ソンウォン社

イ・スンヨル、ペ・ビョンジュ、(2000)、中学生のため正しい性、図書出版、ハンビ

世界基督教統一神霊協会、(1966)、原理講論、ソウル：成和出版社

ジョン・スチュワート・ミール、キム・ヒョンチョル訳、(1992)、自由論、ソウル：ソグァン社

レイモンA・ペルリオティ、ク・スンヒ訳、(2000)、Good Sex：良いセックスとは何か？、ソウル：ミヌム社

統一思想研究院、(1993)、統一思想要綱、統一思想研究院、P168

Hare・R・M(1963)　*Freedom and Reason.*　Oxford:Oxford University press.

Mappes,Thomas A.(1992).　"Sexual morality and the concept of using another person."

Mappes,Thomas A.,& Zembaty,Jane S.(1992).　*Social Ethics: Morality and social*

policy, 3rd ed.,New York:McGraw-Hill,Inc.
Moon,Sang-Huy.(2004). *Pure Love Studies: Origin,preliminary outcomes,and future direction.* Dissertation. University of Bridgeport.

---

[1] リュ・ジハン、（2002）、性倫理、ソウル：ウルリョク、P10

[2] パク・チャング、（1997）、性的自由はどこまで許容されるべきか？、ソウル：タムロン社、P78

[3] キム・サンウォン、(1999)、性教育/性相談の理論と実際、ソウル：教育出版社

[4] 統一思想研究院、(1993)統一思想要綱、P168、

[5] ムン・サンヒ、(2007)、父母-子女が共に果たす絶対性、鮮文大学校、P70

[6] 真の愛における真の意味は絶対、唯一、不変、永遠の性質を表現する。真の根拠は原存在に由来し、原存在は真の愛の根源者で、その属性が絶対、唯一、不変、永遠の性質を持っている。人間の性は原存在が拡張された自我だから人間と原存在との愛の関係は当然真の愛の関係である。

[7] Mappes,Thomas A(1992)"Sexual morality and the concept of using anotherperson."Mappes,Thomas A.,& Zembaty,Jane S(1992). *Social Ethics: Morality and social policy*, 3rd ed.,New York:McGraw-Hill,Inc

[8] キム・サンウォン、(1999) 、前掲書

[9] ユン・カヒョン、(1990)、性心理学、ソウル：ソンウォン社、

[10] イ・スンヨル、ペ・ビョンジュ、(2000)、中学生のための正しい性、図書出版、ハンビ

[11] 統一思想は、人間は個性真理体として唯一無二の存在でありつつ、縦的横的に連結した関係として存在する延滞と説明する。

[12] 統一思想は人間が原存在に似て、ロゴス的存在なので自由意志により理性と法則に従って生きていくことになっていると説明する。宇宙は自然法則に従って運行されるが人間の身体は自然の法則に従うが心は価値法則すなわち規範に従って秩序を維持しながら生きていくようになっていると説明する。従って存在世界で人間だけが価値法則、すなわち規範により秩序的な人生を生きていく。この規範は一般的な伝統的倫理でいう規範と

区別され、時代、思想、文化を超越して、普遍的に人間が守らなければならない「当然しなければならないこと」と「当然してはならないこと」と規定している。

[13] ムン・サンヒ、(2007) 、前掲書、P 73

[14] 統一思想研究院、(1993) 、前掲書、P 30

[15] 統一思想研究院、(1993) 、前掲書、P 180～185

[16] 人間は原存在に似て、ロゴス的存在なので理性と法則によって秩序を維持しながら生きていくが理性の作用が法則の作用よりはるかに大きく作用する。しかし自然世界の存在は低級な段階に降りて行くほど法則の作用がより一層大きく作用する。

[17] アリストテレス、チェ・ミョングァン訳、(1988)、ニコマス倫理学、ソウル：ソグァン社、P 48

[18] 統一思想研究院、前掲書、P 366、上の脚注で上論したとおり、ここで強調する法則、規範は文化により変わる規範と区別される。

[19] エドワード・ウィルソン、リ・ハヌム訳、(2000)、人間本性に対し、ソウル：サイエンスブックス

[20] レイモンA・ペルリオティ、ク・スンヒ訳、(2000)Good Sex：良いセックスとは何か？、ソウル：サイエンスブックス

[21] Hare,R.M.、(1963)、*Freedom and Reason*、Oxford:Oxford University press

[22] リュウ・ジハン、(2002)、前掲書、P 43

[23] 統一思想は、人間一人一人は上中下、前中後、右中左の6方向が原存在を中心に球形運動しながら、延滞として存在すると説明する。
家庭での3代圏は祖父母、父母、子女で構成された3世代を代表して、4大心情権というのは両親の愛、夫婦の愛、兄弟姉妹の愛、子女の愛の4種類の愛の圏を意味する。心情と愛は内外の関係なのでこの論文では4代愛で表現した。

[24] ムン・サンヒ、(2007) 、前掲書、P 71

[25] ムン・サンヒ、(2007)、前掲書、P 140

[26] 文鮮明、(2007)宇宙の根本を探して、ソウル：成和社

[27] 文鮮明、(1996・9・8)、文鮮明先生み言選集、279巻、P 222

[28] 世界基督教統一神霊協会、(1966)原理講論、ソウル：成和出版社

[29] エドワード・ウィルソン、リ・ハヌム訳 (2000)、前掲書、P 45、

[30] 文鮮明先生の教えは人類全体を神様の子女として一つの血統関係で理解し、人類全体を神様の縦的な真の父母から創造された大家族だと説明している。

[31] 文鮮明先生は人間の良心作用に対して強調しながら、良心が導くままの生活を送らなければならないと強調される。統一思想では良心と本心を区別して、良心は相対的価値を中心一つの心の作用で説明しているが文先生が示される良心は統一思想でいう良心と区

別されてご使用になる。これは統一思想でう本心作用で理解することができる。

[32] スポーツ朝鮮と結婚情報会社、2007年、性友が20-30代未婚男女、564人を対象にアンケート調査した結果。

[33] レイモンA・ペリオティ、ク・スンヒ訳、前掲書、Ｐ75

[34] リュウ・ジハン、(2002)、前掲書、Ｐ43

[35] ジョン・スチュワート・ミール、キム・ヒョンチョル訳、(1992)、自由論、ソウル：ソグァン社、Ｐ34

[36] Mappes,Thomas A、(1992)、前掲書、Ｐ28

[37] エドワード・ウィルソン、リ・ハヌム訳、(2000)、前掲書、Ｐ70、

[38] ジョン・スチュワート・ミール、キム・ヒョンチョル訳、(1992)、P36

[39] Mappes,Thomas A.、(1992)、前掲書

[40] リュウ・ジハンの性倫理の本で普通の人々が一般的に受容可能な性倫理の基準として性行為の責任論と性関係の尊重論を提案している。

[41] 文鮮明、(2007)、平和メッセージＸＶ、「摂理的観点から見た3大主体思想」、平和訓経、Ｐ278

[42]リュウ・ジハン、(2002)、前掲書、Ｐ93

[43]リュウ・ジハン、(2002)、前掲書、Ｐ94